

丸山直起

『ホロコーストとアメリカ—ユダヤ人組織の支援活動と政府の難民政策』

(2018 みすず書房)

孫 占 坤

(PRIME 所員)

ホロコースト、ジェノサイドなど、戦間期から第二次世界大戦に至るナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺関連の研究書や体験記、回顧録の数は今日、日本語だけでも枚挙にいとまがない。しかし、本書評で取り上げるこの一冊は重厚で厳粛な研究著書であると同時に、一読すれば、心が大変打たれる「感動物語」の一冊でもある。著者の丸山直起先生は国際政治学者として東アジア・アメリカのユダヤ人の歴史をはじめ、イスラエル、中東などの国際関係を幅広く研究され、明治学院大学法学部政治学科で長年教鞭をとった後、現在、明治学院大学名誉教授を務めている。著者は長年PRIMEの所員も務められ、その関係で評者はこれまで直に著者からユダヤ人やイスラエルの話を伺う機会にも恵まれていた。今回、この一冊を読むことで、ユダヤ人にまつわる様々な問題への著者の強い探求心や、ユダヤ人問題が照らす国際社会の不条理に対する著者の考察の深さについて改めて脱帽するばかりである。これまで色々な形で著者から教わってきた一人として、今回の書評依頼を光栄に思うと同時に、身に余る「重任」、いや、「重圧」とすら感じる。というのは、ここで取り上げる本書は著者長年の孜々たる努力の結晶であるのに対して、評者は中東といい、ユダヤ人の歴史といい、完全な「門外漢」である。従って、以下は「恥を忍んで」という心情で、本書に対する

評者の若干の印象、読後感を述べることで書評に代え、「重圧」から解放させていただきたい。

本書全体について

まず、本書全体のあらすじについて。本書は1930年代から第二次世界大戦の終わりごろにかけて、ヨーロッパのユダヤ人に迫るかつてない危機に対して、国際社会はどのように向き合ったのかを検討した一冊である。この国際社会の取り組みについて、著者は二つの側面から掘り下げ、その一つとして、アメリカ政府をメインとしつつ、ヨーロッパやラテンアメリカ諸国など、当時の世界各国「政府」がどのように取り組んでいたのかを検討している。他方、第一次世界大戦末期にアメリカのユダヤ人社会で誕生した救援組織である「アメリカ・ユダヤ人合同配分委員会 (AJJDC=「ジョイント）」という「民間」組織がいかなる活動をしていたかについても詳細に検討している。後者に対する検討の中で、著者は「ジョイント」の国境に跨る活躍ぶりを描くと同時に、同組織の一員として遅く、果敢に危機に立ち向かう一人の女性ソーシャルワーカーであるローラ・マーゴリスの半生も取り上げ、言わば、「マクロ」と「ミクロ」の両面からアメリカの民間をバランスよく描き出している。以上のように、国家と民間、また民間についても組織と個人の両面に留意

しつつ、本書全体は戦間期、戦時中、第二次世界大戦後という激動の時代の流れに沿い、各々の時代における上記三者の取り組みを巧緻な筆致で描き出している。「註記」だけでも50頁を超えていることが示すように、本書は著者が長年の資料収集、当事者に対するインタビューを含めた現地調査など緻密なリサーチの上で書き上げた厳粛な研究著書の一冊であるが、ユダヤ人の歴史や20世紀前半の世界史に詳しい専門知識を持たない一般読者にも読みやすく書かれている。このような著者の細かい配慮のおかげで、20世紀前半に起きたユダヤ人の絶滅という深刻なイシューを扱う本書が、読者の心を打つ「感動物語」にもなっていると評者は感じる。

本書の三つの「主人公」について

本書は次のような構成となっている。「序章 ホロコーストへの道」、「第1章 難民はアメリカをめざす」、「第2章 危機の時代とアメリカのユダヤ人」、「第3章 ドイツの反ユダヤ政策とアメリカ政府の対応」、「第4章 セントルイス号の悲劇」、「第5章 戦時下のジョイント」、「第6章 解放の年」、「終章 なぜアウシュビッツは爆撃されなかったのか」。本書はこれらの本文350頁に加え、上述のように分厚い註記、更にあとがき、各種索引や略語一覧など合計430頁を越える大著となっている。本書のエッセンスは「門外漢」の評者にはとても紹介しきれないが、本書でユダヤ人の危機に向き合った主な三者、即ち、アメリカ政府、民間であるジョイント、更にジョイントの一員として活躍した一人の女性であるローラ・マーゴリスに対する著者の検討を評者の理解する範囲で紹介させていただきたい。

① アメリカ政府とユダヤ人難民

本書は少なからぬ頁を割いて、戦間期や第二次世界大戦期におけるアメリカ政府のユダヤ人危機

への対応について検討を行った。そこでは著者はまず、アメリカの移民政策形成の歴史全体を俯瞰し、その上で、アメリカにおけるユダヤ人の移民の歴史、更に20世紀前半のアメリカ政府の対応の是非を取り上げている。著者によれば、アメリカは移民国家として出発し、建国後、不断に移民を受け入れることで国家の活力を生み出し、アメリカを世界最大の国家に押し上げてきた。一方、19世紀末以降、移民の規模や質について規制に乗り出し、移民政策は国家と社会のありようを決定することになり、時々深刻な政治的対立を引き起こすようにもなっている。このように俯瞰した上で、著者はユダヤ難民とアメリカの関係に筆を進めていく。著者はコロンブスの探検時代から19世紀末に至るまで、ヨーロッパからのユダヤ人移民はアメリカの社会と文化に多大な足跡を残していると認めつつ、特定のエスニックグループに特別な優遇措置を与えることに対して、アメリカ社会に強い拒否反応が存在することを指摘する。今日に至っても、ユダヤ人の救済におけるローズヴェルト大統領の「不作為」について批判は根強く存在するが、移民受け入れに対する排他的国内世論や官僚機構の壁、安全保障的配慮など、諸々な要素が大統領の決断に影響を及ぼしていると著者は指摘する。

② 穏健的で現実主義的な「ジョイント」

本書は第一次世界大戦後に発足したアメリカ・ユダヤ人合同配分委員会（「ジョイント」）の戦間期・第二次世界大戦期の活動ぶりについて詳しく検討しているが、その中で評者にとって特に印象深かったのは当該組織の穏健的姿勢と問題に取り組む場合の現実主義的アプローチという著者の指摘である。著者によれば、ジョイントには当時アメリカ・ユダヤ人社会の様々な立場にいる代表的人物が参加し、同団体は非政治性やユダヤ人の基本的自立を促すための援助などを活動の基本方針

としていた。そのような方針の下、既に戦間期にナチス・ドイツの危険性を見抜き、より急進的路線に走るシオニストに比べると、ジョイントはユダヤ人のヨーロッパから離れ、パレスチナへの建国には熱心ではなく、逆に、戦間期や第二次大戦期においても、ユダヤ人の実際の救済に役に立てば、ナチス・ドイツとの交渉、取引も厭わなかった。

③ ローラ・マーゴリスの活躍

イスタンブール生まれ、アメリカ育ちのローラ・マーゴリスは後にソーシャルワーカーとなって危機に瀕するユダヤ人の救援に世界を飛び回ることになる。著者によれば、彼女のこのような行動を可能にしたのは、滞在先でその国の言語を取得する天賦の才能が備わっていたほか、イスラエルの地はユダヤ人とアラブ人両民族の郷土であり、ユダヤ人が自分の目標を実現するためにはアラブ人との共存が不可欠だと小さい頃から家庭で教わっていたからである。20世紀前半にはキューバ、上海、ヨーロッパなどへ飛び回り、危機に瀕するユダヤ人の救援に当たり、20世紀半ばにイスラエルへ移住し、それから長きに渡り、ジョイントやイスラエル政府とも協力の下、イスラエルに移住した高齢者、病人、身障者の社会復帰プログラム「マルベン・プログラム」に携わるようになった。彼女は、言わば、人生の大半を「弱者のユダヤ人同胞」の支援に捧げることになるが、「あとがき」に記されているように、晩年の彼女はイスラエルの右派政権のパレスチナ政策に対して激しい口調で批判していた。

評者の感想

本書を読み終え、色々なことについて考えさせられた。書評の字数的制約もあり、以下の二点について感想を述べさせていただく。第一に、本書は20世紀前半のユダヤ人の危機に対するアメリカ

国家及び民間の向き合い方を検討したものであり、その限りで、単なる歴史研究だとの分類も可能であろう。しかし、「不法移民阻止のために壁を」と大統領が声高に叫び続け、連邦最高裁も特定のイスラム国家からの入国禁止大統領令を是認する今日、本書は現在のアメリカ社会を理解する上でも有意義であるように思う。近年のアメリカはいつもの道を歩んできた普通のアメリカの姿なのか、それともアメリカの原点から既に大きく逸脱しているのか、そのような思いでもう一度本書を噛みしめたい。第二に、本書を読んだ後、いや、読みながら、イスラエルについても更に考えさせられた。本書にも記されているように、第二次世界大戦で生み出された膨大な数のユダヤ人難民は戦後も行き場を失って途方に暮れていた。イスラエルの建国はそのような途方に暮れるユダヤ人難民に家を用意したことも意味するのである。この意味において、イスラエルは他のどの国家よりも難民の悲惨さを最も知っているはずである。しかし、幾たびの中東戦争を通じて、イスラエル建国の地となるパレスチナから、現在数百万人に達する「パレスチナ難民」が作られ、この難民問題もイスラエル、パレスチナ紛争の最も大きな争点の一つとなっている。ローラ・マーゴリスなきイスラエルのユダヤ人達が、20世紀後半に起きているこの大きな難民問題に、一体どのように向き合うつもりなのか、タイミングを見つけて彼らに聞いてみたい。

2019年12月23日、東エルサレムのホテルにて